

平成31年度 学校経営計画に対する最終報告書

石川県立宝達高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>1 生徒の進路志望100%実現を目指すために、3年間を見通した学力向上とキャリア教育の推進を実践する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習規律の遵守と家庭学習の確立 ・基礎学力の定着と生徒の学ぶ意欲の喚起 ・各教科科目等の特性に応じた見方・考え方と思考力・判断力・表現力の育成 	①	各教科 教務課	学習規律（学びの4か条）を守っている生徒の割合が A：100% B：95% 以上 C：90% 以上 D：90% 未満	生徒調査(12月) A(39.4)+B(43.1) = 82.5% 達成度：D	中間評価時（94.6%）より12ポイント、昨年同期（97.5%）より15ポイント減少しており、特に1年生の自己評価が低かった。全教室に掲示してある『学びの4か条』を遵守することが、授業を効率的に進める上でも、気持ちよく学習を進めるためにも必要であることを生徒に再認識させる必要がある。学校全体で繰り返し指導し、学びの4か条を遵守することで「質の高い学び」を実現し、生徒の学力向上や教師の授業力向上につなげたい。
	②	各教科 教務課 各学年	授業外学習時間が60分以上の生徒の割合が A：70% 以上 B：60% 以上 C：50% 以上 D：50% 未満	生徒調査(12月) 120分以上 10.1% 60~120分 32.1% 60分以上計 42.2% 達成度：D	1時間以上の学習時間を確保している生徒の割合は、中間評価時（31.2%）及び昨年同期（31.7%）より10ポイント以上高くなった。多くの生徒が授業以外でも学習に取り組んでいるが、30分未満（23%）の生徒も少なくない。「わかる授業」で基礎・基本の確実な定着を図り、生徒の学習到達度や個々の進路希望に応じた課題を与えてチェックを行う等、生徒一人一人の実態を正しく把握し、小規模校の特性を生かしたきめ細かな指導を行う。また、資格取得や検定合格に向けた学習にも積極的・計画的に取り組ませたい。
	③	各教科 教務課	授業のなかで、ICTの活用力が向上したと感じている教員の割合が A：80% 以上 B：70% 以上 C：60% 以上 D：60% 未満	教職員調査(12月) A(50.0)+B(16.7) = 66.7% 達成度：C	中間評価時（52.9%）より10ポイント以上高くなった。ICT環境の整備により、授業準備の負担が軽減され、ICT機器の稼働率が上がった。互見授業や校内研修、他校での授業参観、先進校視察などを通して、各教員が学習指導の効果を高める方法について研究実践した成果が見られた。今後も、絶えず指導方法の改善を図り、生徒の教科内容を的確に理解する能力を育成し、学習意欲の向上や学力向上につなげていきたい。
	④	各教科 教務課	主体的・対話的で深い学びの授業を取り入れている教員の割合が A：95% 以上 B：85% 以上 C：75% 以上 D：75% 未満	教職員調査(12月) A(44.4)+B(44.4) = 88.8% 達成度：B	中間評価時（94.1%）及び昨年同期（94.1%）より5.3ポイント減少した。自己評価はBであるが、対話的であっても「主体的な学び」や「深い学び」が恒常的に実現できているとは言いがたい。生徒の基礎学力の向上と併せ、校内研修等を通して教員のファシリテーションスキルの向上を図り、更なる研究実践を通して生徒主体の授業づくりを定着させたい。
	⑤	各教科 教務課	授業がわかりやすいと感じる生徒の割合が A：90% 以上 B：85% 以上 C：80% 以上 D：80% 未満	生徒調査(12月) A(77.6)+B(17.3) = 94.9% 達成度：A	中間評価時（96.7%）より1.8ポイント減少したが、昨年同期（88.5%）より6.4ポイント増加した。例年、後期は学習内容の難易度が上がるため、ポイントは下降傾向にあったが、今年度は昨年同期より上昇した。研修や授業参観の実施、ICTの有効活用等を通して授業改善に努め、様々な困難を抱える生徒に対するきめの細かい支援を行ってきた成果が垣間見えた。今後も生徒の実態に応じた指導方法や学習意欲を育む支援のあり方を検討する。

重点目標		具体的取組	主担当	達成度判断基準		分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1	生徒の進路志望 100%実現を目指すために、3年間を見通した学力向上とキャリア教育の推進を実践する。 ・学習規律の遵守と家庭学習の確立 ・基礎学力の定着と生徒の学ぶ意欲の喚起 ・各教科科目等の特性に応じた見方・考え方と思考力・判断力・表現力の育成	⑥ 上級学校理解・職業理解などを通じて、生徒の進路意識を向上させ、早期に進路目標を設定することができるよう指導する。目標とする進路実現のために学習に主体的に取り組むよう、各学年のキャリア教育を段階的・系統的に関連付けて実施する。	進路指導課 各学年	各学年のキャリア学習が進路選択に役立っているとする生徒の割合が A：95% 以上 B：85% 以上 C：75% 以上 D：75% 未満	生徒調査(12月) A(58.7)+B(25.7) = 84.4% 達成度：C	中間評価時 (91.9%) より 7.5 ポイント、昨年同期 (92.7%) より 8.3 ポイント減少し、昨年度の B 評価から、本年度は C 評価に下がった。学年別では、3年生の 94.1% (中間時 60.6%) に対して、1・2年生は 71.0% (中間時 72.4%) と相対的に低かった。職業についての基礎的な知識や技能を習得させ、社会と関連付けた教科学習等を通して、社会人としての基礎的資質・能力を育成し、職業観・勤労観を育みたい。また、教科等横断的な学習活動や家庭・地域と連携した取組を実践し、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現するための力を身に付けさせたい。
		⑦ 生徒ひとりひとりの早期の目標設定を行い、切磋琢磨し相乗効果をあげるための学習グループの形成を目指す。進路ガイダンス、模擬試験、進学補習、作文・面接指導など、系統的・段階的な取組を実施する。	進路指導課 各学年	生徒の進路実現率が A：100% B：95% 以上 C：90% 以上 D：90% 未満	96.7% 達成度：B	生徒の希望や活動成果に基づいて進路指導を行い、特に進路が決められない生徒に対し、段階的な指導を実施している。進路行事の事前・事後において、生徒と対話を重ね、生徒一人一人の状況を把握し、目標の見直しを支援するなど、ガイダンスとカウンセリングをより充実させる。また、三年後を見据えたキャリア教育の見直しを含む計画的な取組みにより、主体的に進路を選択できる能力や態度を育成し、進路実現の可能性を上げたい。次年度よりキャリア・パスポートを活用し、学習の振り返りを新たな学習や意欲につなげ、将来の生き方を考える活動の基礎にしたい。
学校関係者評価委員会の評価		○家庭学習に取り組む生徒と取り組まない生徒の二極化の解消が課題である。「わかる授業」の取組を授業外学習の習慣づけに結びつけてほしい。 ○アクティブ・ラーニング型の授業が定着しつつあると思うが、取組みを学力向上に繋げてほしい。 ○キャリア教育をより充実させ、生徒が自立的に進路を選択する能力の向上に繋げてほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		○「学び」そのものの楽しさや意義を感じさせることによって学習意欲の向上を図りたい。作業的であっても授業で学習したことの定着を実感できる課題を提供したり、資格取得に向けた学習を奨励したりするなど、「やられる」学習から「やりたい」と思える学習への変革を図っていく。 ○全教科において、本校の生徒に適合した「主体的・対話的で深い学び」を研究実践している。校内研修等を通して教員の授業力向上を図り、協働学習や学習成果の発表を通じて生徒にアウトプットする機会を多く与えるなど、全員が学び合える環境づくりを模索していく。 ○地域・関係機関やPTAと連携した取組により、職業観・勤労観及び将来設計能力を育成している。校内外での多くの人や社会との関わりを通して、生徒が社会への関心を高め、他者の存在意義や自分の役割を認識し、社会との関係を学んでいくプロセスのなかでキャリア形成を図っていく。また、進路が決められない生徒には、これまでどおり、心に寄り添った個別の支援・指導を実施していく。				

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2 自主自律の精神を持った社会人としての資質・能力を身に付ける。 ・基本的生活習慣の確立と規範意識の高揚 ・挨拶などのマナーやコミュニケーション能力の育成	① 登下校指導を行い、教師が積極的に挨拶を交わし、全校挙げて生徒によるあいさつ運動の充実を図るとともに、身だしなみ(端正な制服の着こなしと髪型)を守ることによって、社会人の一員としての自覚を促す。	生徒指導課 各学年	生徒同士や職員、外部の来客や地域の方々に対し、自分から進んで挨拶ができ、服装・髪型の身だしなみがきちんとしてると答えた生徒の割合が A：90% 以上 B：85% 以上 C：80% 以上 D：75% 未満	生徒調査(12月) 挨拶 A(51.4)+B(37.6)= 89.0% 達成度 B 髪型・服装 A(52.3)+B(37.6)= 89.9% 達成度 B	「自ら進んで挨拶ができる」と回答した生徒の割合は、昨年度(79.7%)に比べて9.3ポイント増加した。一方で、自発的に挨拶することを億劫に感じている生徒も少なくない。挨拶運動を生徒会活動の一環として位置づけ、生徒が主体となって取り組むことにより、学校生活全体のマナー向上の気運を高めた。 「身だしなみがきちんとしていない」と回答した生徒の割合は、昨年度(91.0%)と同程度であった。毎月実施している身だしなみ指導は浸透しているが、生徒の自主・自律の精神を育むため、挨拶運動と同様、生徒会活動として取り組み、生徒の自己指導力を高めた。
	② 全教職員が協働して、遅刻ゼロ運動を進める。 ・各学年の1日の平均遅刻人数を毎月集計する。 ・遅刻の多い生徒には、個別面談を行い、生活の見直しや改善につなげる。	生徒指導課 各学年	1日の平均遅刻者数が全学年合計で A：1人 未満 B：2人 未満 C：3人 未満 D：3人 以上	1日あたりの遅刻者数=0.19人 達成度 A	中間評価時(0.19人)からほぼ横ばいで推移している。不注意(寝坊、忘れ物等)による遅刻は少なく、遅刻常習者もほとんどいない。遅刻指導を行っているが、素直に反省し、遅刻を繰り返すことはない。指導方法については、生徒との対話を通してその原因を探り、生徒の実態(性格、健康面、家庭状況等)に応じて寄り添う指導を行っている。今後も、家庭や担任・厚生課等と連携し、遅刻を放置しない指導を心掛けたい。
学校関係者評価委員会の評価	きちんとした基本的生活習慣を身に付けておくことが大事である。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	挨拶・身なりに対しては自律的に行動できる生徒が増えているが、登下校中の並進歩行や「歩きスマホ」など、校外でのマナー違反や危険行為が見受けられる。生徒会や家庭との連携による安全指導を徹底したい。				

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3 宝達高生としての愛校心や自己有用感を高めながら、人間性や社会性を磨く。 ・部活動や特別活動、地域貢献活動の充実と活性化	① 平常清掃の大切さを呼びかけ、積極的な参加を促す。また、環境整備委員等の働きかけによる美化コンクールを通じ、環境美化への自主性を高める。	厚生課	役割分担をし、協力して清掃活動に取り組んでいる生徒の割合が A：90% 以上 B：85% 以上 C：80% 以上 D：80% 未満	生徒調査(12月) A(58.7)+B(30.3) = 89.0% 達成度 B	中間評価時（94.6%）より 5.6 ポイント、昨年同期（94.3%）より 5.3 ポイント減少した。毎日の清掃は、無目的な作業になったりマンネリ化したりしがちで、「できればやりたくないこと」として捉えている生徒もいる。学期始めや校内美化コンクール等の時宜を得て、生徒同士で清掃活動の意義を確認し合う機会を設けるなど、主体性・責任感・公共心等の涵養を図り、日常生活の自発的实践に結びつけたい。
	② 基本的な生活習慣確立のために年間6回「生活自己チェックカード」を実施し、生徒一人ひとりの生活状況やいじめ等の悩みを把握し指導に活かす。	厚生課 生徒指導課	生活自己チェックカードの結果を生徒指導に活かし、生活改善につなげていると答えた教員の割合が A：100% B：95% 以上 C：90% 以上 D：90% 未満	教職員調査(12月) A(45.0)+B(50.0) = 95.0% 達成度：B	中間評価時（72.2%）より 22.8 ポイント増加した。生活自己チェックカードの結果は、全教職員間で共有されており、それぞれの取組の中で生活改善指導を行っている。また、「保健だより」と「保健委員会だより」を発行し、各種啓発活動を行っている。朝食摂取については、「毎日食べている」と回答した生徒が約70%であった。早寝早起きの大切さと併せて指導を行い、朝食を食べない生徒を減らしたい。 スマホ使用については、家庭内ルールを設けている割合は約45%であった。PTAと連携した取組を強化したい。
	③ 部活動の組織的運営を図り、積極的に部活動に加入し、年間を通して継続的に取り組むことができるよう指導する。	生徒会課 各学年	部活動に加入し、継続的に取り組んでいる生徒の割合が A：90% 以上 B：80% 以上 C：70% 以上 D：70% 未満	生徒調査(12月) A(46.8)+B(33.9) = 80.7% 達成度 B	昨年度同期（91.1%）より、約10ポイント減少した。3年生の91%に対して、1・2年生は76%（中間評価時86%）と相対的に低くなった。退部や安易な欠席を繰り返す生徒を減らすため、部顧問・担任・家庭が密に連携し、生徒に部活動の意義や効果を理解させ、持続的な参加を促す必要がある。適切な部活動運営により、他者との好ましい人間関係の構築を図り、意欲の向上や自己肯定感、責任感、連帯感を涵養したい。
	④ 生徒会や部単位での活動を主として、地域への貢献活動やボランティア活動に積極的に取り組むことにより、生徒の成長を促す。	生徒会課 各学年	地域への貢献活動やボランティア活動に取り組んだと答えた生徒の割合が A：80% 以上 B：75% 以上 C：65% 以上 D：65% 未満	生徒調査(12月) A(38.5)+B(40.4) = 78.9% 達成度 B	中間評価時（76.4%）より 2.5 ポイント、昨年度同期（75.2%）より 3.7 ポイント増加した。地域活動の意義を理解し、生徒の意識が学校外にも向けられ、社会の一員として貢献しようとする意欲と態度が見られた。進路指導課と連携し、多くの生徒がより積極的に参加する手立てを講じたい。また、事前事後指導をより充実させることにより、地域社会と自分とのつながりを意識し、自己の在り方生き方を深く考える時間を増やしたい。
学校関係者評価委員会の評価	より多くの生徒が部活動で活躍できるよう、環境整備に努めてほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	近年の生徒減の影響で、団体種目の部が休部になっている。部活動を持続可能なものとするため、現在、3つの運動部で外部コーチと協力して部活動を運営している。また、運動部と文化部の兼部を認めて部員数の確保に努めている。部活動を奨励し、生徒の心身の健全育成を図りたい。				

重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）	
4	近隣の小・中学校との連携を密にし、地域に信頼される開かれた学校づくりを推進する。 ・学校の教育活動を積極的に保護者や地域に発信	① 学校からの配布物やホームページ（HP）等の情報を通して、生徒、保護者および地域住民に本校の教育活動を理解してもらう。	総務課 各学年	学校からの配布物やHP等による情報が、教育活動の理解に役立つと答えた保護者の割合が A：80% 以上 B：70% 以上 C：50% 以上 D：50% 未満	保護者調査(12月) A(64.2)+B(32.1) = 96.3% 達成度：A	中間評価時（82.4%）より13.9ポイント増加した。本校ホームページへの1日あたりのアクセス件数が、前年度の156回から321回となり、2倍超になった。トピックスのリアルタイムの更新や生徒のコメント記載など、内容を見直したことによりオリジナルなコンテンツを発信することができた。学校だより等の配付や一斉メール配信、マスコミを通じた情報発信も積極的に行った。今後も受信者の興味を惹きつける内容になっているかを評価・検証しながら情報発信を続けたい。
学校関係者評価委員会の評価		ホームページが迅速に更新されており、デザインも見やすく情報を検索しやすい。掲載内容も充実しており、閲覧が楽しみである。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		トピックスで掲載しているコンテンツについては、活動の様子や生徒の感想だけでなく、閲覧者の立場に立って、事業や活動の目的、目標、成果等がわかりやすいよう、さらに改善を行っていく。				
重点目標	具体的取組	主担当	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）	
5	職員は勤務時間を意識した効率的な働き方に努める。	① 限られた時間を意識した働き方を行う。	各課主任 教科主任 部活動顧問	見通しを持ち計画的な業務ができた教員の割合が A：90% 以上 B：80% 以上 C：70% 以上 D：70% 未満	教職員調査(12月) A(70.0)+B(25.0) = 95.0% 達成度：A	ほとんどの教員が働き方改革の必要性を認識した上で、計画的かつ効率的なタイムマネジメントを心掛けた。若手研修やOJTを活用しながら、若手教員のサポート体制を維持する一方で、若手教員にも責任ある企画や運営に参加させるなど、業務の平準化を図った。働き方改革の本来の目的を見失わず、更なる環境整備・業務改善に努め、ゆとりを持って生徒と関わり指導する時間を確保したい。
学校関係者評価委員会の評価		効率的に業務を遂行し、健康に留意しながら働き方改革を着実に推進してほしい。				
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		働き方改革の本来の目的を見失わず、教職員全員で考え方を共有し、さらなる環境整備・業務改善に向けて「チームとしての学校」をつくり上げる。				